

## 2025 年 JWDA/調査研究部会 地方開催・熊本視察会セミナー報告書

### 【開催概要】



本視察会は、2016年熊本地震からの復興を遂げた熊本の地において、改めて自然の力と向き合い、木材利用の現状と可能性を再確認する機会として実施したものです。復興の過程では、「くまもとアートポリス」が果たした役割が大きく、木造建築を通じた景観形成や地域アイデンティティの再構築は、多くの県民や来訪者に深い共感と誇りをもたらしてきました。その建築群は単なる施設整備にとどまらず、人々が集い、語り、新たな交流を生み出す「場」としての力を発揮しています。

さらに現在は、「ONE PIECE 熊本復興プロジェクト」による観光誘致や話題喚起が相乗効果を生み、国内外からの来訪者が増加し、地域経済や交流人口の拡大にも寄与しています。

### 内 容：

#### ■ 講演：「熊本県の木材利用のいま」

講演内容：「ものづくりを通して楽しみながら伝える「木育」」

熊本大学大学院 教育学研究科 田口浩継教授（公共政策学博士）

「地域工務店が手がける 小中規模 木造・木質化施設建設の可能性」

新産住拓株式会社 取締役/まちづくり事業部部长 兼 企画設計部部长

川本哲也氏

「くまもとアートポリスの知名度を活かした木造建築物の魅力発信について」

熊本県 土木部建築住宅局建築課 審議員 小佐田洋一氏

■浜田醤油株式会社見学

■熊本地震震災ミュージアム見学（2024年ウッドデザイン賞受賞・激励賞（審査員長賞））

■南阿蘇鉄道高森駅/交流施設見学（2024年ウッドデザイン賞受賞・環境大臣賞）

■阿蘇くまもと空港見学（2024年ウッドデザイン賞受賞・激励賞（審査員長賞））

日 程 2025年6月26日（木）～27日（金）

主な視察先 熊本県

参加者 18名

企 画 調査研究部会

#### 【スケジュール】

##### 6月26日（木）

13:10 熊本大学 くすのき会館 レセプションルーム集合

13:30 開催挨拶と協会紹介

13:45 講演①熊本大学大学院 田口浩継教授

「ものづくりを通して伝える木育」

15:25 講演②新産住拓(株) 川本哲也取締役

「地域工務店が手がける 小中規模 木造・木質化施設建築の可能性」

16:25 講演③熊本県 土木部建築住宅局建築課 小佐田洋一審議員

「くまもとアートポリスの知名度を活かした木造建築物の魅力発信について」

17:15 ウッドデザイン賞について 日本ウッドデザイン協会 杉澤広報普及啓発部会長

##### 6月27日（金）

8:45 ホテル出発

9:15 視察①「浜田醤油（隈研吾設計）」見学

11:15 視察②「熊本地震震災ミュージアム（2024年激励賞受賞作品）」

12:20 ランチ 山見茶屋

13:45 視察③「南阿蘇鉄道 高森駅（2024年受賞 環境大臣賞受賞作品）」

15:45 視察④「阿蘇くまもと空港（2024年受賞）」

SDGs ミライパーク見学

終了後 解散

【報告】6月26日（木） セミナー

開催テーマ：「木育」と復興におけるウッドデザイン賞作品の地域産材活用の影響力

開催会場：熊本大学 くすのき会館 レセプションルーム

26日は木育の教育的意義、地域工務店による木造施設建設の展望、県による木造建築物の魅力発信など、多様な視点からの講演を拝聴しました。

JWDAの市岡事務局長は昨年度環境大臣賞を受賞した南阿蘇鉄道高森駅・交流施設など新しい取り組みが熊本県でも生まれていることに触れ、

「地域の土や木材、デザインの力が暮らし、社会、地域にどのように役に立つのかについて一緒に考えたい」とコメントしました。



◇JWDA 市岡事務局長



#### ■講演①：「熊本県の木材利用のいま」 熊本大学大学院 田口教授 講演

熊本大学大学院 教育学研究科 田口浩継教授（公共政策学博士）

【講演内容】「ものづくりを通して楽しみながら伝える「木育」



#### 木育の可能性を教育と公共政策の視点から

熊本大学大学院 教育学研究科の田口浩継教授（公共政策学博士）は、地域資源としての木材が教育や社会に果たす役割について講演しました。本講義では、木材と人との関わりがもたらす教育的・社会的効果に焦点が当てられ、「木育」という活動の意義が紹介されました。



## 「木育」とは——文化をつなぐ教育

田口教授によると、木育とは「木材や木製品を通して子どもの感性と創造力を育む教育活動」ということです。森林資源への理解や環境意識を高めるだけでなく、都市化により薄れてしまった「自然とのつながり」を回復する役割を持っているといます。

しかし現状は厳しく、木製品が好きと答える人はわずか4人に1人、森に行きたいと考える人は9%に過ぎないそうです。

かつて日本では、娘の誕生を祝って桐を植え、嫁入り時には桐箆笥に仕立てる風習や、畳の香りを心地よいと感じる暮らしが当たり前存在していました。こうした文化背景があったため、「木育」という言葉すら必要なかったということでした。



## 命をつなぐプロジェクトの取り組み

2016年、熊本大学は『『おおえのき』100年復活計画』でウッドデザイン賞を受賞しました。

熊本県森林組合連合会などと連携し、倒木を木製品として蘇らせる「命をつなぐ」活動と、新たな芽を育てる「命をまもる」活動を両輪で展開。子どもたちに命の循環と木の価値を伝える教育が広がっています。



## 木育は社会運動でもある

田口教授は、木育を単なる教育活動にとどまらず「社会運動」として捉えます。講演では、祖父母と孫と一緒に木工に取り組む光景や、大人も子どもも夢中で手を動かす時間が生まれる様子が紹介されました。



特別支援学級での木工活動では、木目や色、音の違いから生まれる作品はすべて唯一無二。完成品を家族に褒められることで子どもの自己肯定感が高まるという、これも木の魅力であり。優劣をつける必要がなく、木育を通じて人と人のつながり



も育まれているとの事です。

### 現代の課題と再生への道

一方、現代の子どもたちのものづくり離れは深刻と感じているそうです。教授は、授業で作られた本棚が駅のゴミ箱に大量に捨てられていた事例を紹介。「出来は良くても使われない。木やモノへの関心が薄れている証拠です」と指摘しました。

木育は単なる技能教育ではなく、木を通じて価値観や文化を次世代に継承し、家族や地域の絆を深める営みです。今回の講義は、森と人、文化と暮らしをつなぐ教育の重要性を改めて教えてくれるものでした。



### 総評

田口教授の講演は、地域材を活かした教育活動がもたらす可能性を広く示す内容でした。木育は子どもたちの感性や創造力を育むだけでなく、家族や地域社会のつながりを強め、文化と暮らしを未来に伝える重要な活動であることを再認識させられます。

### ▶関連サイト

・ウッドデザイン賞「『おおえのき』100年復活計画」命をつなぐプロジェクト

<https://www.wooddesign.jp/db/production/590/>

・熊本大学

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/gakubutou/kyouikugakubu>

### 講演②：「地域工務店が手がける 小中規模 木造・木質化施設建築の可能性」

新産住拓株式会社 取締役 川本哲也 氏



### 【講演内容】

熊本県を拠点に住宅建設と不動産開発を手がける新産住拓株式会社の取締役、川本哲也氏より、地域工務店による木造住宅営業と国産材利活用の推進についてお話を伺いました。

同社は土地活用や分譲住宅の企画・販売にも取り組み、地域の住宅ニーズに幅広く対応しています。

従業員 154 名のうち、約 20 名が大工研修生として在籍しており、次世代の職人育成にも力を入れているとのこと。

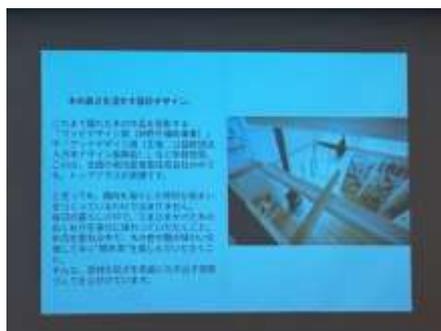


### 30 年続く国産材へのこだわり

新産住拓は、特別な意匠や華美な仕様ではなく、「心地よい住まいと暮らし、季節の過ごし方」を大切にしたい家づくりを目指しているそうです。

そのなかで 30 年以上にわたり国産材にこだわり、木材づくりから取り組みを行ってきました。

住宅には限りなく 100%に近い天然乾燥の木材を使用。これを可能にするため、地域の林業や製材業と緊密に連携し、「赤ちゃんも安心して暮らせる住まいづくり」を実現してきたと川本氏は語ります。



### 地域工務店ならではの強み

川本氏は、地域の小規模工務店だからこそできることとして、利用者や購入者の要望に柔軟かつ迅速に応えられる体制や、地域の職人・同業者との密接な連携を挙げました。また、近隣のお客様との信頼関係が、心地よい住まいづくりを支える大きな基盤になっていると強調します。こうした熊本の木を活かした地道な取り組みは、



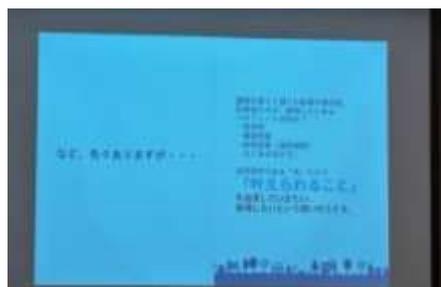
2016 年に「『てまひま』天然乾燥木材の住まいづくり」としてウッドデザイン賞（ハートフルデザイン部門・コミュニケーション分野）を受賞する成果へとつながりました。

### 国産材利用促進の戦略

特に力を入れている分野は施設建築です。

新産住拓では、国産材利用の利点を数値化して提示し、将来的なメリットをわかりやすく伝えることを重視しています。

さらに、減価償却期間が終了する 20 年後を見据え 20 年後からの木材の価値や活用方法を併せて提案。



これにより木造建築を採用した企業や施設の雇用促進や集客力向上が見られるようになり、結果的に企業ブランドの強化にもつなげていることを示すことができるようになったといいます。近年ではさら同業者結びつくことで徐々にこの輪を広げているそうです。

### 木の魅力を広める活動

木材の効果や魅力を伝えるため、同社では住宅購入者だけでなく社員や施設建築関係者も対象に、森林見学ツアーや木工教室を実施。

特に熊本大学・田口教授との連携イベントは、木と人とのつながりを深める好機になっています。また、環境負荷を考慮し、ZEB等の最先端施設の建築など非住宅分野木質化、さらに地域にある貴重な建築物のリノベーションなどの経験を活かし、住みたいまちづくりにも取り組んでいるとの事です。



### 総括

川本氏の講演からは、地域に根ざした工務店が、国産材を活かして街と人をつなぎ、未来の暮らしを形づくる確かなビジョンが伝わってきました。今後の活動にも大きな期待が寄せられます。

### ▶関連サイト

・ウッドデザイン賞 2016年受賞「てまひま」天然乾燥木材の住まいづくり

<https://www.wooddesign.jp/db/production/592/>

・新産住拓株式会社

<https://shinsan.com/>

### 講演③：「くまもとアートポリスの知名度を活かした木造建築物の魅力発信について」

熊本県 土木部建築住宅局建築課 審議員 小佐田洋一 氏



## 【講演内容】

続いて登壇したのは、熊本県土木部建築住宅局建築課の小佐田洋一審議員。  
熊本のまちづくりや観光振興に寄与し、さらに 2016 年の熊本地震からの復興においても大きな役割を果たした「くまもとアートポリス」について、その魅力と取り組みを紹介しました。

### 木と地域をつなぐ建築群

くまもとアートポリスは 1988 年から始まり、建築家やデザイナーが参加して地域の自然や文化に調和する公共建築をつくり続けています。



小佐田審議員によれば、最大の特徴は「デザイン性」「機能性」「地域資源の活用」の三位一体であることだそうです。特に木材など地元素材を積極的に取り入れ、住民の暮らしの質向上と文化の継承を同時に実現してきたといいます。

### 震災復興における存在感

講演では、熊本地震（2016 年）の復興における役割についても触れられました。単なる再建ではなく、木造をはじめとする地域性を重視した復興建築を推進し、被災地に新たな景観と希望をもたらしました。その象徴的事例が「みんなの家」です。木の温もりと自然光が利用者に安心感を与え、地域の人々の心を再び結び付ける役割を担っているそうです。



### 若手育成と技術継承

小佐田審議員はまた、くまもとアートポリスが果たす人材育成の役割についても強調されました。若手建築家に設計の場を提供し、職人とともに伝統的な木工・建築技術を継承する仕組みは、まさに“生きた学びの場”。災害への理解や地域づくりの視点も含め、幅広いスキルが磨かれているといいます。



### 未来へ向けた発信

情報発信にも積極的です。

Instagram や Facebook など SNS を通じ、最新のプロジェクトや木造建築の魅力を広く発信し、熊本の木材建築文化を国内外に届けているとのこと。

## 総括

小佐田審議員の講演を通じて、くまもとアートポリスが単なる建築プロジェクトではなく、地域の未来を形づくる“文化運動”であることを改めて感じました。

### ▶関連サイト

・くまもとアートポリス

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/115/85889.html>

・熊本県 土木部建築住宅局建築課

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/115/>

## ■ウッドデザイン賞について

日本ウッドデザイン協会 杉澤広報普及啓発部会長

最後に、日本ウッドデザイン協会（JWDA）広報普及啓発部会の杉澤部会長より、協会の概要やウッドデザイン賞の紹介が行われました。くまもとアートポリスからはこれまで多くの優秀な作品が応募・受賞しているものの、協会への参加はまだないため、今後の情報交換や参加促進を呼びかけました。



あわせて、近日発刊された「木とともに創る 105 のデザイン」の案内や、昨年度から連携を開始した世界三大デザイン賞の一つ「iF Design Award」についても説明がありました。

これらを通じて、熊本県における協会活動の理解促進と普及啓発を進める意義が共有されました。



## 総括

この講演をもって1日目のプログラムを終了。

熊本県における木材利用や国産材の普及促進について理解を深め、翌日の現地見学に向けて関心が一層高まる充実した内容となりました。